

『天正遣欧使節肖像画』人物名異同のことなど

附属図書館情報サービス課雑誌特殊資料掛長 松田 博

天正年間、キリスト教巡察使アレシャンドロ＝ヴァリニャーノの勧めにより、九州の大友宗麟、有馬晴信、大村純忠のキリシタン三大名は、四名の少年を使節として他の随員二名とともにローマ教皇のもとに派遣した。案内役の神父メスキータをはじめとした一行は、1582（天正10）年2月20日長崎を出航し、インドのゴアを経て1584（天正12）年8月10日リスボンに上陸し、その後ポルトガル・イスパニアを経て、海路イタリアに上陸、1585（天正13）年3月22日ローマに入った。当地で大歓迎を受けるとともに、翌3月23日ローマ教皇グレゴリオ十三世に謁見している。

この、当時13歳～14歳の少年がそれこそ命がけで数年を費やし海外にわたったという驚異的で画期的な出来事、あるいは教皇の未曾有の謁見は、ヨーロッパ諸国にたいへんな衝撃と反響を与え、それだけに使節や日本に関するたくさんの出版物が刊行されたのである。その一つに、三大名の書簡の紹介をはじめゴンザレス神父の紹介演説、ボッカバズリ神父の答辞、使節の旅行等について触れた『Acta Consistorii pvblice Exhibiti a S.D.N. Gregorio Papa XIII. Regvm Iaponiorvm Legatis Romae, Die XXIII. Martii. M.D.LXXXV....1585.』があるが、これはイタリア語版『Breve Rilatione del Consistoro(sic) pvblico, Dato a gli Ambasciadori Giaponesi dalla Santita di Papa Gregorio XIII. in Roma, il di 23. di Marzo 1585.』、ドイツ語増補版『Zeitung, Welcher Gestallt, im Martio dieses fünfvdachtzigsten Iars, ; etlich König vnd ... 1585.』等をはじめ1585年中に十六版ものものが各地で刊行されたようである。この『日本使節グレゴリオ十三世謁見記』は、京都大学には経済学部上野文庫に前記三種ともが所蔵されて

いる。翌1586年には、遣欧使節に関する詳細な報告書でもある『Gualtieri, Guido 『Relationi della Venvta degli Ambasciatori Giaponesi a Roma sino alla partita di Lisbona...1586. 』』が刊行されているが、附属図書館サトウ文庫にはローマ、ヴェネチア、ミラノ(1587年)で刊行のものが各一部、経済学部上野文庫にはローマ刊のものが二部、ヴェネチア刊のものが一部のそれぞれ所蔵がある。『グワルチェリ『遣欧使節記』』をはじめ使節に関する書物の刊行は、『Boscaro, A. 『Sixteenth century European printed works on the first Japanese mission to Europe....1973』』によれば、1585年中だけでも四九種を数えたという。附属図書館にはこれら以外にも『Newe Zeyttung auss der Insel Japonien... 1586.』、通称『天正遣欧使節肖像画』(以下『肖像画』)と呼ばれるものが所蔵されている。

この『肖像画』は、第十一代総長濱田耕作(青陵)博士が、1930(昭和5)年オランダのナイホフ書店から購入・旧蔵していたものを、1952(昭和27)年子息の稔氏より京都大学附属図書館に寄贈されたもので、ドイツのアウグスブルグで印刷された木版画である。標題には『日本からの新聞』とあり、上部3行の記事末尾に「7月25日ミラノ到着、8月3日出発の日本王侯使節四青年の来往」(1)との記述がある。中央には案内役兼通訳のメスキータ神父が、その周りを取り囲むように四名の使節の肖像画が描かれている。『肖像画』は原寸大の桐箱に納められ、上面は厚手のガラスで覆われて保管されており、箱内側には、「本肖像画は先孝が昭和の初年和蘭ナイホフ書肆より求め愛蔵していたものですが 此度そのゆかりの京都大学図書館に寄贈し 以て学術研究に資することにし

『天正遣欧使節肖像画』



ました 昭和二七年十一月十四日 濱田 敦書」との墨書がある。

濱田青陵入手のことについて、幸田成友は「博士がハーグの書林ナイホッフから大金を問うて購入せられたものだ。・・・全く稀品には相違ないが、二百五十フロリンとあっては、日本貨が今程下落していなかった当時でも、私共には手が出せず、従って京大の考古学研究室で本図を博士から示された時、自分は羨ましいという私情より、博士が日本の学界のためにこの稀有の一大史料を加えられた特志に対し深く敬意を感じた。」(2)と触れている。なお、この『肖像画』の京都大学への所蔵登録は1954(昭和29)年4月30日、登録番号は968943となっている。

歴史上の一大壮挙である少年使節のヨーロッパ訪問は、現刊のほとんどの歴史書(低・中学年向け歴史図書を含む)に記述されるところであるが、記載に際しこの『肖像画』がたびたび使われている。ところが、『肖像画』の人物紹介について、最近に至るまで異同というが混乱

がみられるのである。例えば『ベッソン氏コレクション 天正少年使節と「原マルチノの演説」』筑波大学附属図書館(1995年)、『宮崎県史通史篇 中世』県史編纂委員会(1998年)などであるが、そこでは左上の人物を千々石ミゲル、右下を中浦ジュリアンとされている。これは明らかに誤りと思われるので、この点について以下に触れ、あらためてその同定を行っておきたい。最初に、これまでのいくつかの刊行物の『肖像画』四少年の異同を一覧しておくとのようになる。

1) 濱田青陵『天正遣欧使節記』岩波書店(1931年4月)

千々石ミゲル	伊藤マンシヨ
(原マルチノ)	(中浦ジュリアン)

2) 幸田成友「天正遣欧使節の肖像画『学鏡』」Vol.43, No.7 丸善(1939年7月)

中浦ジュリアン	伊藤マンシヨ
原マルチノ	千々石ミゲル

- 3) 松田毅一『天正少年使節』角川書店
(1965年8月)

中浦ジュリアン	伊藤マンショ
原マルチノ	千々石ミゲル

- 4) 海老沢有道『日本キリスト教歴史事典』
教文館(1988年2月)

中浦ジュリアン	伊藤マンショ
原マルチノ	千々石ミゲル

- 5) 『ベッソンコレクション 天正少年使節
と「原マルチノの演説」』

筑波大学附属図書館(1995年6月)

千々石ミゲル	伊藤マンショ
原マルチノ	中浦ジュリアン

- 6) 『宮崎県の歴史』(「新版県史シリーズ」
45) 山川出版社(1999年9月)

千々石ミゲル	伊藤マンショ
原マルチノ	中浦ジュリアン

次に、『肖像画』四少年の同定であるが、これについては幸田成友に先の文章に続けて簡潔明瞭にまとめられているので、少し長くなるがそれを引用して結論づけておきたい。

「然るに去年ミラノ出版ベニヤミノ・グチェレス氏の伊太利における日本最初の使節 Beniamino Gutierrez: La prima ambascieria Giapponese in Italia. Milano, 1938. を見るに及んで、十年の疑團は一朝にして氷解した。グチェレス氏の新著はミラノ市の貴族ウルバノ・モンテ Urbano Monte (壽86歳1647年没)の日記中日本使節に関する本文を摘録し、これを本体として種々の研究を加へたものであるが、同書に挿入せられた四使節およびメスキッタ師の肖像画が独逸版(『肖像画』のこと 筆者)の底本をなすことは、何人も否認し得ざる所であろう。一紙にひとりの肖像を描き、その上段に氏名・身分・年齢・下段に賛美の詞を筆写してある。

人々の眼の周囲が著しく白くなっているから、原図はおそらくは彩色入で、独逸版はこの彩色をも模したのであろう。独逸版には下段の説明中に使節及び神父の名が見えるが、肝要肖像画の下に氏名が無い。神父と使節主席の伊藤マンショとは図柄で想像が付くが、残り三人は不明である。然しグチェレスによると、独逸版上段左が中浦ジュリアン、下段右が千々石ミゲル、下段左が原マルチノである。独逸版では中浦ジュリアンだけが手袋を持っているが、グチェレスによると千々石ミゲルもメスキッタも手袋を持っているのみか、左向きのメスキッタが独逸版には右向きになっている。五人の肖像を一枚に収めて図柄が甘く纏まるようにこの変更を生じたのであろう。」(3)以上であるが、これらの記述から明らかなように、右上が伊藤マンショ、右下が千々石ミゲル、左上が中浦ジュリアン、左下が原マルチノということになる。

ここで、モンテの日記に記されている四名の使節像の説明について紹介しておきたい。ただし、記述内容については、とりわけ出身や身分については必ずしも正確をえていないので、その点を考慮して読むことが必要かと思われる。伊藤マンショについて、肖像画上部の説明は「ドン・マンショ、年齢は二十歳、日向城主の近親で、豊後城主ドン・フランシスコによって派遣された。」とあり、肖像画下段の讚美の詞は「王冠を手にするこの青年は、正使ドン・マンショと呼ばれる。はるかかなたの国より、三年の歳月をかけきたった。しかし、この航海で費やされた日々は決して無意味なものではない。このすばらしきイタリアはもちろん、ローマにおいても、スペインにおいても、ミラノ社会においても、見聞を深め、また親交を深めたからである。」とある。千々石ミゲルについては、同様に「ドン・ミカエル、年齢は十八歳、有馬城主ドン・プロタシオの近親であり、大村の若殿ドン・パルトロメオの従兄弟にあたるが、彼らに派遣された。」、「ここに遣われしも

う一人の正使ドン・ミカエルは、ドン・マンシヨの信頼厚き同行の人であり、深い信仰に支えられ、洗礼をうけてより神に身を捧げしが故に、態度には気品があり、全てに賞賛できる人である。彼が母国に帰りいたるなら、彼の名声は世界を駆けめぐるのであろう。」原マルチノについては、「ドン・マルチノ、年齢は十七歳、日向侯国の有力者である。」、「ここに見ゆるもう一人はドン・マルチノであり、他の使節と全く甲乙つけがたい。彼が深い信仰に目覚めて以来、彼はキリストの崇高さを常に身に持ち続け、上品で、極めて傑出した才能をそなえており、礼儀正しさに満ち、慈愛にあふれている。彼は強い信仰心を持つことのできるひとりであり、信仰の真の援護者である。」中浦ジュリアンについては、「ドン・ジュリアーノ、年齢は17歳、肥前侯国の貴人である。」、「あなた方がここに見るもう一人の青年は、極めて有能なドン・ジュリアーノである。彼が本国に帰りいたらば、彼を賞賛するもろもろの文書は、気高き心の人たちを勇気づけることであろう。彼は、他の使節たちとともに、無比のキリスト教徒に出会うために母国を離れた。そして、他の誰よりも我らの宗教を賞賛しながら、ミラノを出発した。」(4) 以上のような内容かと思う。

最後に、『肖像画』の人物紹介に混乱が生じた要因について考えられるところを少しふれておきたい。何よりも第一の要因は濱田が『天正遣欧使節記』において、左上の手袋をもった人物を正使の一人である千々石ミゲルとしたところにあると思われる。曰く「此の木版画には鬚髯のある僧服の像とが七分身に描かれている。後者の像の右上には赤く染まった耶蘇会の記号があり、これは疑いもなく通訳メスキータ師であろうが、他の四人は孰れを誰と確かに定め難

い。ただ右上の一像は頭巾の外に黄金の冠を持って居り、一行の主席伊藤マンシヨを現はし、従って左上の白い手袋をもっているのは千々石ミカエルを示し、従って下段の二人は原マルチノの中浦ジュリアンの積もりと想像せられないことはない。」(5)と。第二は、濱田と幸田の間には『天正遣欧使節記』の「自序」にみられるように深い親交があり、それ故ウルバノ・モンテの日記についても濱田は情報を得ていたのかもしれないが、その年1938年の春頃から体調を崩し、7月25日に逝去していることから、あらためて筆をとることができなかったと思われる。そんな事情がして『天正遣欧使節記』の記述が濱田の見解として、とりわけ『肖像画』の旧蔵者であっただけに、強く印象づけられたのではないだろうか。以上を紹介しておきたい。

- 1) 濱田青陵『天正遣欧使節記』岩波書店(1931年4月)
ただし、「8月5日」は誤植か
- 2) 3) 幸田成友「天正遣欧使節の肖像画」『学燈』Vol.43, No.7 丸善(1939年7月)
- 4) グチェレスが参照したウルバノ・モンテの肖像画については、Boscaro, Adriana『Sixteenth century European printed works on the first Japanese mission to Europe(Leiden, E. J. Brill, 1973)』および松田毅一『天正少年使節』角川書店(1965年8月)の収録図版を見ていただきたい。
- 5) 濱田青陵『天正遣欧使節記』岩波書店(1931年4月)

(まつだ ひろし)